

増田萬次氏（建築技師）

に聴く

学校建築四十年

聴き手

河野 仁 昭

同志社へ入社した頃

——同志社へ入社されたのは、何年ですか。

増田 昭和十三年です。

——どなたかの紹介で？

増田 当時、同志社の建築関係の顧問のようない関係にあった京都大学の大倉三郎先生のご紹介です。大倉先生は、同志社中学に学ばれ、京大建築科に進学された方ですね、同科の第一回卒業生ですよ。後に京都工芸繊維大学の学長を勤められました。大倉先生の恩師は、同志社とは関係が深く、例えば栄光館やゼームズ館を設計された武田五一先生です。

——増田さんが入社された頃には、武田先生は同志社にはあまり関係されていなかったわけですか。

増田 そうでした。わたしは大倉先生から、「同志社中学の醇厚館の建築をやることになったんだが、現場の監督をやる者がおらん、君ひとつやってくれんか」と言われましたね。

——なるほど、それで同志社へ。その頃、本部の事務所はどこにあったんですか。

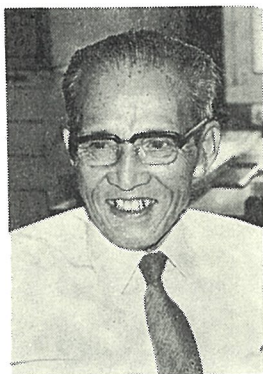
増田 現在の弘風館の北半分あたりです。

木造平屋建てで、一部二階がありました。その後、そこへ旧至誠館を建てることになり（昭和十八年竣工）、本部はアーモスト館へ移り、さらに、昭和二十四年十一月に有終館へ移ったわけですね。

わたしが入社したのは、湯浅八郎総長が退陣された後で、上谷統さんが総長事務取扱兼財務部長でした。本部の財務関係は、宮沢鎮之さんが責任者の形で、高橋米三、岩本小波、小山忠三郎、盛口憲二、橋本正次さん等。庶務の責任者は田中良一さんと、小林喜久雄、森川正雄、山田健三さんと、そういった人がいました。管轄関係は岩本さんが担当していました。管轄関係は岩本さんが担当していましたが、技術的なことはわからんで、外部に依存せざるをえない状態でした。建築関係の仕事は、当時の同志社にはあまりなかったから、一応はそれでやれていたわけです。

——大学の事務所は、どこにあったんですか。

増田 致遠館一階の、いま監査室になっている部屋で、泰山捨蔵、矢野直一さんら四、五人ぐらいでした。当時は庶務、会計、学



増田 萬次氏

費、営繕など、みな本部が集中管理でやっており、大学は教務事務を主にやっていた。予科長は山田貞夫先生でしたが、真面目で誠実で、然も人当たりのよい先生でした。

入社当時に手掛けた建物

——増田さんの最初のお仕事は、中学の醇厚館（昭和十四年六月竣工）の監督ですね。

増田 そうです。それから、アームストロングの東側が、東寮をつぶしたまま空地になっていて、そこへわたしの設計で、古木材を集めてきて此春寮を建てました（十五年一月竣工）。富森京次先生が文学部神学科の主任で、その富森先生などが中心になられて募金をされ、神学教育のための寮を設けられたのです。そこへ、昭和三十七年にゲスト・ハウスを

建てることになり、此春寮は北小松学舎へ移築しまして、いま対湖寮になっていきます。

さらに、昭和十四年一月に建てた法学部学生読書館。これは法学部の一父兄が、確か一万円を寄付され、今の茶室（寒梅軒）の西に建てたのですが、これもいまは北小松へ移して、ゼミナールなどに使われています。雄心館というのがそれです。

——此春寮と法学部学生読書館、この二棟が戦前にわたしが建てた木造建築で、現在も残っているものですか。

——ついでに申しておきますと、北小松学舎には以上の他に、旧松陰寮（これは元下村孝太郎邸でした）を移築した対山寮があります。

——そういった仕事以外に、わたしが入社した頃には、建物の図面といえば栄光館とアームストロングのものぐらいいしかなかったものですが、明治以来の同志社の建物を全部実測して、図面を作りました。これがいろいろ役に立ち、現在もそれを基礎にして、修正を加えながら使用しています。

——わたしは、昭和十五年八月十五日に、海軍軍属に徴用されて佐世保へ行きましたので、精思館（十六年竣工）や旧至誠館などの建築

には関係できませんでした。

岩倉校地問題の処理

——増田さんは岩倉のお方ですから、同志社の岩倉校地のことはよくご存知でしょう。

増田 もちろん知っています。あの辺は田圃でしたよ。ただ、岩倉川の水源が浅くて、水量が少ないのです。それで、水に難儀をしていた所です。そういう問題もあり、また、岩倉村の発展のためということで、西村金三郎理事に説得されて同志社へ売ったのです、昭和三年頃のことでしたが——。

——西村理事の当初の構想では、購入した土地のうち不要の部分を宅地造成して売却し、その収入で借入金返済する、という計画でした。ところが、あの辺の東寄り土地は、表土の下が粘土質で、井戸を掘っても水が出ないんです。掘っても掘っても粘土ばかり。それも理由のひとつであったと思いますが、宅地の買い手があまりなかったらしい。

——水道はまだなかったんですね。

増田 水道などまだありません。そんなことと、なにしろ昭和初年は経済の大恐慌時代で、世の中が実に不景気だったですからね

え。西村さんが考えたような具合にはいかなかったのです。だから、戦後になって同志社が水道を引くまでは、実に淋しい限りでした。

——高商商業学校が出来てもですか。

増田 そうです、二十年一日の如しですよ（笑）。周囲はすべて農地のままでね。

——高商は井戸水が出たんでしょか。

増田 あの辺はいいんです、水が出ました。とにかく、戦後になって同志社が水道を引き、それから徐々に地価も上り、あの周辺が発展してきたのです。

——すると同志社は、土地購入の借金返済に困ったわけですね。

増田 全くそのとおりです。それで島本徳三郎理事が、当時新潟の日本石油株式会社の経理課長をしておられた宮沢鎮之さんに頼んで、同志社へ来ていただいて、同志社財政の立て直しと、岩倉土地問題の整理に当たっていただくことになったわけですよ。

宮沢さんは、そりゃ大変な苦勞をされ、休みも返上し、朝早くから晩おそくまで勤められ、努力をされました。そして、爪に灯をとぼすようにして借金を返済して行ったわけです、節約また節約でした。

岩倉土地について申しますと、大口の借入金

金の返済ができないものだから、売却を予定していた不用の土地を、有力な財界理事である大沢徳太郎、小林正直さんをはじめ、石川芳次郎、村田竹治郎さんらに肩替りしていただかねばならなかった。そのことが戦後までも尾を曳いて、肩替りしていただいた土地は、不在地主ということで、農地改革でとられたりですね。だから、西村金三郎理事は約七万坪を購入していたのですが、現在では約五万坪しか同志社校地はありません。

とにかく、宮沢さんは四苦八苦されました。同志社に対する功労者の筆頭は、わたしは宮沢鎮之さんやと、今でも思うております。ところが、戦後は、節約をあまりやかましく言うたこともあって、評判はパッとしませんでしたが、同志社のために随分尽された方です。今はその功績を認める人も少なくなりましたが、あのような方は、後にも先にもおりませんよ。

戦後——中学校旧体育館と有隣館——

——軍属から復員されたのはいつですか。

増田 昭和二十年十月です。

——そしてすぐ復職なさったわけですね。

増田 軍属も国家にご奉公するんやからということで、徴用中も同志社から月給の半額が支給されておりましたね。そのこともあり、また、太平洋戦争中は職員も兵隊や軍属にとられて、学校には働けるような人がほとんどいなくなっていたのです。建物なども、荒れてガタガタになっておりました。作業員の山口末吉さんが、管繕関係の仕事も兼ねてやっていたような状態でしたね。徴用解除になったので学校へ挨拶に行ったら、「これからも引き続き勤めてもらわんことには、学校はどうにもならん」と言われたので、復職することにしました。

ところが、復職はしたものの、校舎の修繕をするにも資材が全然ないので、どうしようもない。文部省から僅かず配給があり、昭和二十四、五年頃までは、その配給の範囲でやるほかないので、とても十分なことはできませんでした。

——中学校の旧体育館が父兄会の寄付で竣工したのは、昭和二十四年ですが、その頃は資材などの事情はよくなっていたんですか。

増田 いや、まだまだ駄目でした。鉄骨な



昭和30年頃の管財・管繕関係者

どの配給はない時代で、やむをえず、名古屋の愛知時計という会社の爆撃で破壊された工場の古鉄骨を買って来て、それで間にあわせました。床板などは、中学校が京都府庁と交渉して、特別に配給してもらいました。ガラスも配給でしょう、セメントに至っては、闇でないと手に入らず、苦労しました。

——同年にやられた有隣館もそうでしょうね。

増田 もちろん同じこと。あれはテニス・コートをつぶして建てたのです。新制大学には大きな教室が必要だから、是非造って欲しいと教務から注文がありましたね。やはり愛知時計のつぶれた工場の古鉄骨を買ってきて、それをつなぎ合して二階建てにしました。わたしは軍属で佐世保にいた当時、鉄骨専門の仕事をやらされていきましたので、その技術が思わぬところで役に立った(笑)。

一階は中教室二、小教室二。二階は大教室一、小教室二。屋根は重い瓦をのせると具合がわるいので、秦孝治郎理事(のち理事長)の斡旋で入手したスレートで葺きました。セメントは進駐軍用のを回してもらうなど、苦心慘愴して造った校舎ですが、戦後の同志社大学では随分役に立った建物でした。

鉄筋コンクリート建築の時代

——有隣館の次が明徳館や新彰栄館で、同志社も鉄筋コンクリート建築の時代になるわけですね。

増田 それは同志社だけではありません。

新制大学は大体どこもそうだったのです。

——明徳館のような大建築を、物資のないときによく思いきってやられましたね。

増田 その頃は、もう大分景気もよくなってきたており、わが国の経済もかなり復興してきて、資材なども入手しやすくなりかけていました。

——朝鮮戦争の頃ですね。

増田 そうそう。新制大学になって、学生を沢山入学させ、マス・プロ教育と申しますか、沢山の学生をひとつの教室に集めて授業をする時代になっていきましたので、それまであったバラック校舎などをつぶして、まず西半分から建築にかかりました。

——設計はどなたですか。

増田 当時工芸繊維大学の教授をしておられた大倉三郎先生です。現場の監督はわたしたちがやり、工芸繊維大学からも応援に来てもらいまして、大倉先生との連絡係として働いていたできました。なにしろあの建物は、昭和二十七年から三十年まで、四期に分けてやった。当初は予定になかった商学部の研究室を上へのせたり、無理な仕事でした。

——その頃に、中学校は新彰栄館を建てま

すねえ。あれはどうして、旧彰栄館とくっつけたんですか。

増田 「便利やから」という中学校のつよい希望で、そうしたのです。わたしらは賛成じゃなかった。

——旧館と新館を廊下でつないだんでしよう。

増田 つないだけど、矢張り使いにくいので、しばらくしか使わなかった。第一、旧館は余りにも古い建物でして、一緒にするのは無理なんですよ。

——「つないだ方が便利だから」と言われたのは、加藤延雄校長ですか。

増田 そうじゃないと思います。加藤校長はおとなしい人で、わたしらの感じでは教員会からちよっと浮いていたように思いました。教員会を牛耳る人は他にいました。

——その頃は、文化財だ、同志社最初のレング建築物だ、だから大事に扱わなきゃいかんというような考えは、なかったわけですね。

増田 なかった。むしろ便利が悪い、教室としては狭すぎる、そういう批判がつよかった。かと言って、つぶすべきだということもなかった。なにしろ学生・生徒、教職員が

どんどん増えて行く時代でしたから、その容れ物というか、施設に追われて、現在のようにならぬ文化財やからどうせんらんといい考えをめぐらす余裕など、同志社全体になかったわけです。

女子部の鉄筋コンクリート建築

——女子部での、戦後最初の鉄筋コンクリート建築は、デントン館ですか。

増田 最初は女子中高の黎明館です。わたしの設計で、現場監督もわたしがやりました。あそこには平安寮というのがあって、それをつぶして建てました（第一期三十年、第二期三十四年竣工）。

女子中高に限らず、どの学校とも父兄会が金を集めて、父兄会役員と校長などが相談をして校舎を建てるのが普通でして、わたしら学校の者が直接タッチすることは余りなかつた。父兄会長さんの権限がつよかったです。ところが、建てて使いはじめてから教員などから苦情が出るのがよくありました。

それで黎明館の建築をやるときに、父兄会長からの要請で千田民衛さんから、「増田君、現場監督をやってくれ」と言われた。わたし

は「それは駄目です、建物というものは最初から手掛けることには、監督だけやってみたところで責任が果たせるものじゃない」と言って断りました。それでも父兄会長はしきりに監督をして欲しいと言っておられました。が、永島嘉三郎女子中高校長が、「そりゃ増田さんの言うとおりだ、設計からやってもらおうじゃないか」ということで、父兄会長とも話がつきまして、わたしがやることになったわけです。

——設計者と現場監督者が全然ちがうといふのは、具合がわるいものではないか。

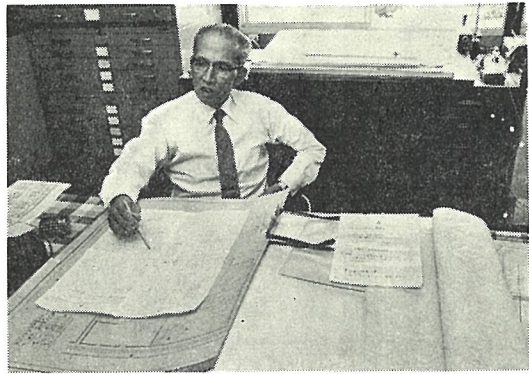
増田 わるいというより、責任を負いきれないのです。設計の不備か監督の責任なのか、そこがはっきりしないのです。

——なるほど。そして、その次がデントン館で……。

増田 そうそう。昭和三十年十一月に、洗濯教室や小使室を撤去して、あれは一挙にやりました。

タイトル・レンガについて

——女子部も含めて、今出川校地の建物は、赤いタイトル・レンガで化粧しています



四十年の仕事を物語る図面類

ね。あれは明治期の建物の色と合せようという方針があつてのことでしょうね。

増田 そうなんですがねえ、明治期のレンガのあの渋い色調に合せるといふのは、実際問題として不可能に近いですよ。わたしも常滑、信楽、多治見など産地へ何度も足を運んで、試験焼きの段階から注文をつけ、監督してきましたが、気に入った色はなかなか出んのでしてね。色だけでなくて、冬、凍結し

て剝離してくるといった問題もあるわけですよ。

とにかく、あれこれ注文をつけて焼かしている間に、工事期間の終りが迫ってきて、やむを得ず妥協したこともあります。弘風館の工事をしたときには、明徳館と有終館のレンガの色の中間的な色調を考えました。北半分の第一期工事の分は大体うまくいったので、南半分の二期工事にもそのタイルを使おうと思つて、見本もとっておき、葉の分量その他についてもちゃんと記録しておいた。ところが実際に焼かしてみると、ちがうんですよ、全くおなじ要領でやってもらつたのに——。

——そうですか、両方おなじに見えるけど。

増田 いや、ちがいます。微妙にちがいます。とにかく、タイル・レンガでは終始苦労しました。

学校建築というもの

——タイル・レンガでご苦労なさつたということは、いままであまり考えたことがなかったですが、他にもいろいろご苦労がございましたらうと思ひますが。

増田 苦労というか、気を使うというか。

わたしは一棟だけ建てたら同志社と関係がなくなる設計技師とちがつて、同志社の職員でしたから、六十五歳の定年まで勤めさせていただけなんらんで、建てた建物に問題があれば在職している間ずっと苦情を聞かされんやらんでしよう、それで気をつかいましたよ(笑)。幸いわたしがやった建物は地下水で地階が水びたしになるといったことはなかった、地下水の水位を十分検討して、豪雨のときでもまず大丈夫という線より上に建てましたから、防水などしなくても水は湧いてきませんでした。やれやれです(笑)。

——雨漏りはどうですか。鉄筋コンクリート建築だけれども、雨漏りがするという苦情を聞くことがありますか。

増田 コンクリート建築で雨漏りがするのは、実は当り前のことですよ。雨漏りなどするものではない、と思うのは素人考えです。それを極力漏らないように万全を期す、まあ、それしかないのです。わたしは外観よりも、目に見えん所を大事にしてみました。そういう問題も含めまして、学校建築というものは、奇抜なデザインとか外観じゃなくて

中味、とにかく、使っている間に問題がおきたり苦情が出るのではないよう最大限に配慮する、それが大事だと考えて設計・施工をやってきました。失敗すると首がとびますし、責任を感じて退職しなければなりません。

——なるほどねえ、一度造ったら、具合が悪いからやりなおす、というわけにはいかないでしょうからねえ。話はちがいますが、工学部の扶桑館はいまだに未完成なんですねえ。

増田 あれは、昭和三十五年から三十八年にかけて二期工事までやっただけですよ。第一期は東半分、これは房岡昭一君にまかしましてね。それから二期工事までやっただけで、三期工事は中学校の醇厚館にかかるので、新館を造ったらその中を大学と中学がどう使うか、その問題を解決せんことには工事が出来ません。その話合いが両者の間でつかないので、三期工事は中止のままになっているわけです。

——二期工事の分を、北へ少しずらして建ててあるのは、中学校のチャペルにあまり接近しては具合がわるいから、という配慮ですね。

増田 そのとおりです。最低十メートルは離しておきませんと、折角のチャペルの景観が台なしになりますので、わたしがそのように計画したわけです。だから扶桑館は折れ曲った状態になっているでしょう。

岩倉校地の建築について

——岩倉の高等学校の礼拝堂の設計（昭和三十年三月献堂）は、増田さんですか。

増田 あれは、横浜の溝口設計事務所です。溝口さんという人は、チャペルの建築を沢山手がけてきた人だからということで、同志社高校が設計を依頼したわけです。しかしどうも、体裁とか室内の感じあまりがパッとしませんな、チャペルらしさがない。

岩倉の体育館も、内部の反響など、若干問題があります。

——増田さんは、岩倉校地の建築には、あまり関与されなかったんですか。

増田 そうですね。理科教室の一部をやっただけです。たまたま木造平屋建の理科教室が、漏電による火災事故で全焼するという事故があった（昭和三十年七月）。それで高校の先生方が京都大学の理科関係の施設を見学

してこられて、「京大では漏電を防止するため露出配線にしている、だから高校もそうして欲しい」と言われるのですが、わたしは「そんなことしなくても、パイプで色分けをして、コンセントを沢山設備しておく。そして生徒が実験のとき間違ふことがないようにすりゃよいことで、露出配線の必要はありません」と言いまして、理科関係の先生方と大論争をして、結果的にはわたしが言ったようにやりましたが、京大のやり方がつねに最善というものではない。事実、京大でも露出配線は無意味だということになって、最近ではやり方が変わってきております。

そんな論争をやったからというわけではありませんが、それ以後岩倉の建築については、日建事務所に委嘱してやっていただいております。立派な設計士ですが、学校建築と一般の建築とは若干ちがいますのでね、多少問題がないこともありません。結局のところ、デザイン、形体を重視するか、生徒が多少乱暴に使っても壊れず、長く持つ建物を造るよう心掛けるか、その違いだと思います。

香里中高の建築について



同志社香里中高礼拝堂（香真館）

——今年は、同志社と香里学園との合併三十周年ですが……。

増田 もう、そんなになりますか。

——はい。増田さんはもちろん、合併当初からの香里を、よくご存知でしょう。

増田 そりゃ、知っております。合併の事情とか、合併のために奔走された人とか！。

施設面のことだけを申しますと、段々状態の地形の土地に、木造校舎がごちゃごちゃ建っておりまして、渡り廊下でつないだり、正直言ってややこしいものでした。そして、もう大分傷んできてしまいました。

あの頃から考えたら、随分変わったものです。まさに一変しました。合併当時の建物で現在も残っているのは、校長室や事務室がある本館だけです。運動場なども、実によくなくなりました。

——増田さんは、ずっと建築に関係してこられたんですか。

増田 初期の段階では、直接にはやっておりません。遠方だということもありますが、今出川校地の仕事だけで手いっぱいというのが実情でした。そこへもってきて、志子益次君が大学の所属になるし、房岡昭一君の健康がすぐれなかったり、というようなことが重なったりしましたから。

それで、香里については、秦孝治郎元理事長の紹介で、以前株式会社大林組におられた渡辺さんの、渡辺事務所にずっとやっていただきました。一つの設計事務所にまかせますと、建物と建物がちぐはぐにならないといっ

た利点があります。

ところが、香里でも、出来上った建物について、それを使っておられる先生方から苦情がいろいろ出まして、香里父兄会でも問題になった。わたしも父兄会に呼ばれまして、

「一体、設計者が悪いのか、施工者が悪いのか」と、意見を聞かれて弱ったことがあります。わたしは、「同じような品物でも、六千円のものと同一万円のものとは違う、それだけのことでないでしょうか」と、まあ、そんな答えをしたことを覚えています。学校建築というものを、どれだけ理解し、知識をもってやっておられるか、といった問題もありますけれど——。

香里建築委員会からやましく言われて、わたしは増築工事のアドバイスに行ったことがありましたが、それは先方の注文どおりうまくいきました。

——結局、安ければよいというものではない、ということでしょうか。

増田 それと、学校建築というものの理解です。丈夫で、生徒達が多少乱暴に使っても壊れないものを造ることです。そのほかにも多少問題がありまして、礼拝堂（香真館）を

建てるとき、設計事務所へは言わないで、香里建築委員会が直接わたしに基本設計を依頼してきました。わたしは定年退職間際のことでもあり、同志社への置き土産にと考えまして、校地のややこしい境界線をはっきりさせたり、図面を書いたり、基本台帳の整理などもありまして、けっこう忙しかった。だから、「基本設計だけやりましょう」と言って引受けたのです。ところが理事会の席上、実施設計のことで苦情が出まして、決定が一月遅れました。その結果、「香里の礼拝堂は、増田にやらせる」と、理事会で決定されたわけです。

そんな経過がありまして、設計から監督にいたるまで、全部わたしがやることになり、昭和五十二年三月に竣工しました。これが、わたしの同志社での最後の仕事です。

——最後のお仕事が礼拝堂の建築というのは、実に象徴的な感じで大へんよろしいですね。永年にわたりまして、本当にご苦労さまでした。

(一九八一年六月三〇日 今出川校地水道管理室にて収録)

新島襄関係文献(抄)

LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NEESIMA

- | | |
|----------------------------------|------------|
| 同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意—口語改記並原文— | 同志社大学出版部 |
| 森中章光編「新島先生書簡集」正・続 | 同志社 |
| 同志社編「新島襄書簡集」—岩波文庫 | 同志社 |
| J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳「新島襄の生涯」 | 岩波書店 |
| 「新島先生記念集」 | 小学館 |
| 「明治文学全集 第四六巻—新島・植村・清沢・綱島集—」 | 同志社校友会 |
| J・D・DAVIS “JOSEPH HARDY NEESIMA” | 筑摩書房 |
| 森中章光著「新島襄片鱗集」 | 同志社 |
| 森中章光著「新島先生と徳富蘇峰」 | 丁字屋書店 |
| 永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」 | 同志社 |
| 徳富蘇峰著「新島襄先生」 | 同志社・同志社校友会 |
| 魚木忠一著「新島襄—人と思想」 | 同志社大学出版部 |
| 岡本清一著「新島襄」 | 同志社大学出版部 |
| 渡辺実著「新島襄」 | 同志社大学出版部 |
| 同志社社史史料編集所編 | 吉川弘文館 |
| 同志社百年史(通史編Ⅰ・Ⅱ) | 同志社 |
| 同志社百年史(資料編Ⅰ・Ⅱ) | 同志社 |
| 和田洋一著「新島襄」 | 日本基督教団出版局 |
| 雑誌「新島研究」 | 同志社新島研究会 |